

「政治思想史」という学問について、大学に入學したばかりの学生はどんなイメージを持っているだろうか。一昔前だと、高校で習った倫理社会で出て来たホッパス、ロック、ルソー、ベンサムなどの理論を本格的に学ぶのかな……くらいのイメージはあったと思うが、最近では、「倫理」も「政治経済」も必修でなくなつたせいか、(少なくとも私の勤めている大学の) 大多数の学生は、具体的なイメージをほぼ持っていないようである。「政治」と「思想史」という堅い言葉が二つくつついた、ややこしそうな学問という程度の印象しか持っていないのが普通のようである。

「政治思想史」は多くの場合、法学部あるいはそれに類した法学・政治学関係の学部・学科の専門科目になっている。学問的はまだあまりスレていない若手の哲学・思想史研究者、あるいは、(かなり) 昔の(いい大学の) 法学部で「政治思想史」を学んだ人であれば、「法学部の学生なら、近代の法や政治の基礎になっている社会契約論、功利主義、市民社会論などに関心を持っていて当然……」と思うかもしれない。しかし、それは幻想である。幻想でないのは、相当レベルの高い法学部に限られた話だろう。

法学部というところでは、司法試験や各種資格試験に関係がある憲法、民法などの実定法関係の授業が幅を利かせている。真面目な学生は、そうした科目には力を入れるが、そうでない科目は、おまけ扱いする。実定法の基礎という位置付けの法哲学や法制史、公務員試験にある程度役に立つ行政学や公共政策論でさえ、おまけ扱いされているふしがある。名前からして、政治学系の中で最も、非現実部門であるように見える「政治思想史」は最も敬遠される。

当然、最も役に立たない政治思想史の教員がやる気を出して、ホッパス、ロック、ルソー等のややこしい理屈を適当に省略しないできちんと教え、試験でも、授業にちゃんと出ていないと解けない問題を出題し、きちんと採点すると、多くの学生から不興を買う。「政治思想史のくせに……」ということだろう。第一回目の授業のイントロで、「『良い政治』とはどういう政治だと思いますか?」というベタな質問を投げかけて、多少関心のありそうな学生たちと数分やりとりしていると、さっさと退出し、ネット上で「ひどかった。五分も耐えられなかった!」、とつぶやいたりする奴がいる——ひどいのは、どっちだ! それが、私にとつての「政治思想史」の現実である。

二〇一〇年のサンデル・ブームのおかげで、「政治思想史」よりもっと堅いはずの「政治哲学」に関心を持つ学生は、法学部に限らず、若干増えた。しかし、その「政治哲学ファン」の圧倒的多数は、「政治哲学」で論じられる学問的テーマ自体に関心を持っていないわけではなく、学問の素人が難しい哲学的議論をすることができるよう巧みに誘導してくれる、サンデル先生の「すごいメソッド」に対して大道芸的な関心を抱いているだけである。

サンデル先生のハーバード白熱教室での授業風景をよく見れば分かることだが、彼は何も知らない学生にいきなり難しい議論をさせているわけではなく、授業の前に政治哲学・政治思想史の古典的テキストを読んで予習しておくように指定している。古典的テキストをちゃんと理解し、咀嚼してくるからこそ、ピンポイントで難しいテーマについて議論できるのである。

そこが分かっていると、予習しなくても、先生の司会次第で、自分もスパーマンになれるような幻想を持つてしまう。そんなことは、サンデル先生も望んでいないだろうし、学問の本質から最もかけ離れた発想である。一昔前は、中学か高校の入学式あたりで、「学問に王道なし」という言葉を聞かされたものだが、今では、大学を卒業していい年になっても、学問に王道あり、と思っている人たちが少なくないようだ。

そうしたことを常日頃から思っていたので、この政治思想史の教科書の編集に当たっては、無闇に妥協せず、基本的な概念をきっちり解説することに力を入れるよう、各執筆者にお願いした。ただし、「きっちり解説する」というのは、ごく少数の同業者にしか通じない自説を自己満足的に展開することではない。伝統的な日本の政治思想史の教科書を見ると、昔の学生が本当に真面目だったのか、執筆した先生たちが「どうせ学生には分かるまい」とタカをくくっていたのか分からないが、異様にマニアックな書き方をしているのが少なくない。そういう書き方はしないように、ということも強くお願いした。

私としては、適度な堅さに仕上がったのではないかと、思っている。この本を通して、「政治思想史」という、それほどエキサイティングではなく、実益にも直結しないけれど、じっくり勉強すれば、古典的な知に対する興味をどんどん湧いてくる堅い学問を持つ学生が、ごく少数でも出てきてくれれば、幸いである。

二〇二二年二月

仲正 昌樹